質問３：あなたは何によって、自分の罪と悲惨さを知ることができますか。

答えⅠ神の律法によって知ることができます。[01]

❶ 質問 3番は、あなたが悲惨か否かについて聞いているのではなく、何によって、罪と悲惨さについて知ることができるのかを聞いています。なぜなら、罪の中にいる人生は自分の悲惨さについて認識できないでいるからです。すべての罪人は、自分が罪人だということについて知識がないのです。従って、恵みが始まる所には、必ず、自分の罪と悲惨さについて悟ることが先に起こります。

これはただ、理論的なことではありません。自分の罪に対する、このような知識には、必ず、心の砕きが同伴されます（ロマ 7:24)。このように先ず、自分の悲惨さを知ってこそ、真の慰めを得られる道を探すことができます。ここで、真の慰めとは、自分の悲惨さについて悲しみ、嘆く者に当てはまります。キリストは直ちに、このように嘆く者を慰めるために遣わされました（イザヤ 61:2)。

従って主は、ご自分の民に第一に要求するのは、彼らが自分の不義を認めることです。そして、彼らが主に赦しを求めることです。その時、主は怒りを収め、彼らに慈悲深い恵みをお与えになるでしょう（エレミヤ 3:11, 13)。そうだとすれば、どのようにして罪人は、自分の悲惨さを知ることができますか。

❷ 悲惨とは、家族と友達から分離された処罰の状態を意味します。罪と罪の性質に対する結果によって審判が下されます。罪はただ、人間の弱さではありま

---

01 ロマ書 3:20, 7:7-25

せん。罪と言うのは、神の戒めに逆らうことであり（Ｉヨハネ 3:4）神に敵対したことです。従って罪は、神の審判を呼び起こさせることなので、悲惨な状態に置かれるようになります。

人類の初めの祖先が罪を犯したことで、エデンの園から追放され、結局、すべての人間を悲惨な状態に至らせました。罪と言うのは、具体的に、神の法を犯したことを意味します（Ｉヨハネ 3:4）従って罪人が、聖霊の御業によって律法を悟るようになれば、自分が罪人である事実を知るようになります（ロマ3:19,7:7)。そして、その罪が神の審判を呼び起こすということと、最も人間は、自分らを救い出せる能力がない事実を悟るようになります。まさに、ここに悲惨があるのです。

❸ それゆえ律法を通して、私たちは悲惨な状態の中に置かれていることを知るようになります。自然的には、自分自身が悲惨だというのを知ることはできません。なぜなら、悲惨なことに慣れてしまって、自分が悲惨だという事実を全然、考えることすらできないからです。罪人たちが自分の悲惨さを発見するようになる最善の手段は、神の律法です。律法を通して罪に対する知識を得るようになります。律法は、神の啓示なさる御心として、私たちが何をすべきなのか、何をしてはならないのかを教えてくれます。それゆえ、命令と禁じる形式を持っています。

ここで先ず私たちは、神の自然法（良心）と、啓示されている律法、つまり、聖書にある律法とを区別すべきです。人間は罪を犯した後は、霊魂の機能が罪によって腐敗されてしまい、良心も同じです。従って、人間の良心だけでは罪に対する知識を得ることができません。良心が律法によって覚醒されなければなりません。旧約での律法は、三重的な性格を持っています。それは便宜上、一般的に儀式法、市民法、道徳法として分類できます。神は儀式法を通して、旧約のイスラエルの民が、どのように礼拝を捧げるのかについて規定なさいました。勿論、イスラエルの民は、儀式法を通して自分たちの悲惨さ、あるいは、汚れを、ある程度

は認識することができました。なぜなら、自分たちの罪と不義のゆえに血を流す捧げ物を続けて奉げなければならなかったからです（ヘブル 10:3)。しかし儀式法は、キリストの犠牲の奉げ物によって成就され、それ以上、私たちに効力がありません（ヘブル 10:9、コロサイ 2:17）。[02] しかし、福音を理解するのには有用です。

律法の構成要素として、次に市民法があります。市民法は、旧約のイスラエル時代の民に必要な政治的な問題と人間同士の法的な関係を規定するものでした。旧約のイスラエルの民は、市民法を通して罪を知ることができました。市民法の中に含まれている道徳的性格のゆえでした。[03] 律法のもう一つの構成要素として、十戒の中に表現されている道徳法があります。道徳法は、すべての人生が神の前に罪人であることと（ロマ 3:9,19)、人間の内面に深く隠れている腐敗性と、罪のむさぼりを明らかにする機能をします（ロマ7:7)。

❹ 従って律法を通して、数多くの悪が自分にあることと、本性自体が神の望まれることとは反対に行っている事実を知るようになります。また、人間の悲惨さは自分の腐敗性にあるということ、その腐敗性が総体的だというのを悟るのです（詩 37:17-18)。神の律法を通して、私たちに、ただいくつかだけの罪があるのではなく、総体的に罪の中にいることを悟るようになるのです。神の聖なる律法が要求することを基準にして、私たちの行動と考えを照らして見たら、私たちの罪がどれほど重くて、深刻なのかを知るようになります（Ⅰヨハネ 3:4)。まるで鏡の前で、私たちの汚れている部分を見ているのと同じです。このように罪に対する知識は、ただ理論的なものではなく、罪に対する悟りによって、胸を裂くようにさせる知識なのです。[04]

02　しかし、福音を理解させるのに、助けを与えます。

03　市民法は、文字的に今日において、これ以上、相関性はありませんが、道徳的内容を含めていることについては、今日にも適用が可能です。

04　勿論、律法の、違う目的として、新しい命の中で私たちがどのように生きて行くべきなのかを導いてくれる役割があります。ハイデルベルク教理問答書においてこの部分は、十戒を説明している、感謝の部分で扱っています。

❺ しかし私たちは、律法についての表面的な知識をもつだけで終わってしまいます。ルカの福音書 10章を見ると、ある律法の専門家がイエスさまに出て来て、律法に対する自分の知識を自慢しようとしました。自分が律法についてどれだけ多く知っているのかを示そうとイエスさまにしゃべり始めます。この律法師は、律法を本当に守ろうと努力した人ではなかったのです。もし、そうだったとしたなら、彼は自分の悲惨さを悟って、極めて謙遜だったでしょう。彼は律法についての、理論的な知識、あるいは、表面的な知識によって、むしろ傲慢になっていたのでした。

また、ルカの福音書 18 章を見ると、金持ちの若い役人も、永遠の命の問題を持ってイエスさまに出て来ました。この若者は、自分は子供の時から戒めを徹底して守って来たとイエスさまに伝えました。しかし、その若者の心の中は、財産に対する関心が多く、それに対する未練も捨てられなかったのです。つまり、律法に対する役人の知識は表面的なものでした。律法を通して自分のうちにある貪欲はまだ発見できないでいたのです。

❻ 律法を通して、自分の罪悪を徹底して悟る以前までは、キリストがなぜ必要なのかを認識できません。自分は相当良い人だと考える者は、自分を欺いているのです（イザヤ 44:18,20)。今まで人生を生きて来る間、悪いことをしていなかったし、正しい生活を生きて来たという考えをする者たちは、まだ、自分の心の腐敗性を見られないでいる者です。最も、自分の心は善だと考えながら、それに頼る者は愚かな者です（箴 28:26)。アルミニウス主義者は、自分の心を信じ、頼る者たちです。

私たちは何よりも、私たちがどれほど大きな罪人であるのかを悟るべきです。自分の罪が髪の毛よりも多くあって、数えることもできない状態であるのを悟るのが必要です。どのようにして自分は罪人だと気づきますか。律法によって気づきます。自分は神の御名をどれほど侮辱し、隣人の物を欲しがり、神が見るのに嫌悪な事々をどれほど多く犯したのかを悟るようになります。このように罪を悟る時、自分

についてしゃべっていた唇は沈黙するでしょうし、自分の悲惨さを見るようになるでしょう。それで、泣き叫びながら恵みを求めるようになるでしょう（使徒16:30）。

質問４：神の律法が、私たちに何を要求しますか。

答えⅠ　キリストが、マタイの福音書22章37-40節で簡略に教えました。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、主なるあなたの神を愛せよ。[01] これが一番の大切な、第一の戒めである。第二もこれと同様である、自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」。[02] これらの二つの戒めに、律法全体と預言者とが、かかっている」。

❶ 教理問答書、質問 3番では、私たちの悲惨さは、神の律法を通して知ることができるということを調べてみました。そうだとすれば、律法を通して私たちは、どうすれば悲惨さを知ることができるのかという、質問をもつようになります。この質問に答えるためには、私たちは先ず、律法が私たちに何を要求しているのかを知らなければならない、その要求に応答する生活を私たちは生きたのかを比較して見ることです。

イエスさまは、神愛と隣人愛として律法を要約されました。十戒に刻まれた二つの石の板に対する解説です。一つ目は、第一の戒めから第四の戒めまで該当することばであり、二つ目は、第五の戒めから第十の戒めまでの要約です。このように律法が要求するのは、私たちに当然な義務であり、生活において唯一の規定です。

第一に、私たちは必ず、神を完全に愛さなければなりません。神を真実にあらゆる力を尽くして持続的に愛することです。しかし、もし、神を完全に愛せない

01　申命記6:5

02　レビ記19:18

のなら、その人は罪を犯していて、必ず、赦しを求め、神と和解しなければならないのです。

第二に、私たちは、必ず隣人を、私たち自身のように愛さなければなりません。もし、それができないでいるなら、罪を犯しているのです。このように律法が私たちに、天におられる神を完全に愛し、隣人を自分の体のように愛しなさいと語っているので、このように戒めを、自分自身の生活に当てて見ると、私たちの良心と心には刺さるしかありません。不足で、完全でない自分たちの姿が、仕方なく目の当たりにするしかないのです。

❷ 私たちは十戒を通して、罪に対する知識を得ることができます。[03] 十戒において、第一の戒めは、神以外、ほかの神々があってはならない（出 20:3）と語っています。神だけが私たちの神であり、私たちに命令ができます。ただ神のために、神と共に人生を生きなさいということです。第二の戒めは、迷信的な意識を持ちながら神を礼拝してはならないこと（出 20:4-5)、第三の戒めは、神の御名に敬愛心をもち、使用しなさいということです（出 20:7)。神とその方の業績などを誹謗したり、悪評する真似は禁じなければなりません。第四の戒めは、敬虔に主日を守り、敬虔な礼拝と祈りとに熱心になりなさい（出 20:8-10)。

第五の戒めからは、人間関係に必要なことです。第五の戒めは、目上の人を尊敬し、敬意を示し、その人に服従し、感謝することです（出 20:12)。第六の戒めは、殺してはならない（出 20:13)。第七の戒めは、心の純潔と体の貞操を綺麗に守りなさい（出 20:14)。第八の戒めは、他の人の所有を欲しがってはならない（出 20:15)、第九の戒めは、偽りの言葉で他人の財産を取ってはならない、正直な生活によって神に栄光を帰しなさい（出 20:16)ということです。勿論、他人の悪口を言うのも第九の戒めに違反することです。

---

03 一方、ハイデルベルク教理問答書の全体構造の中で、第三の部分では、感謝する手段、あるいは、キリスト者の生活の規定として十戒を講論しています。

第十の戒めは、すべてのむさぼりは心の中から締め出し、隣人に損失を及ぼす気配になるようなら、考えすらしてはならない、ただ隣人の幸せと有益のための心だけを持ちなさいということです（出20:17）。結局、私たちは十戒を通して、神を愛することもせず、隣人も愛さなかったことを悟り、「神の前に私は罪人です」と、告白するしかないことを知るようになります。

❸ 律法は、私たちの悲惨さを確かに知らせてくれます。律法は、私たちが義務を果たせなかったこと、不足だったことを告発しながら罪人と定めます（Ⅱコリント 3:7,9)。私たちが神を愛さなかったこと、神を最高に高めなかったこと、神を探し求めもしなかったこと、神の御心にも喜ばず、従順もしなかったことをはっきり悟るようになります。それだけではなく、隣人を愛せず、自己愛によって自己中心的な生活を生きて来たことを認めるようになります。

私たちはみなカインの跡継ぎであることを認めます。「私は、自分の弟の番人なのでしょうか」（創 4:9）ということばを言いながら生きて来たことを認めるしかないのです。律法はこのように、私たちが完全でなかったことをはっきり表わし、私たちの不足を言い逃れできないように悟らせ謙遜にさせます。従って、結局、律法は私たちに救いを探し求めるように、キリストに出て行くようにさせる機能をします（ガラテヤ3:24）。

❹ 神の律法は、人間たちに従順を要求しています。従って、義務を果たせなったことを悟った時、神の恐ろしい審判が待っていることを悟るようになります。罪人は、審判から避けられる道、罪の赦しを受けられる道と方法を探します。結局、律法の目的は、キリストを避け所とするようにさせます（ロマ 10:4)。キリストによって赦しを体験し、救われたその人は、自分がどのようにして救われたのかについて感激し、自分の罪を憎むようになります。そして神の形として更新されることです（テトス 3:3,6、Ⅱペテロ 1:4)。キリストの内にいる時、律法はそれ以上、罪に定めることはできません（ロマ7:4）。

質問５：あなたは、これらすべての戒めを、完全に守ることができますか。

答えⅠ　決して、そうではありません。[01] なぜなら、私は本性の上、神と私の隣人を憎む傾向を持っているからです。[02]

❶ 律法は鏡のようです。私たちが鏡の前に立った時、私たちが綺麗なのか、そうでなければ、汚いのかを知ることができます。そうだとすれば、律法が私たちに要求する、すべてを守ることができますか。聖書はそうではないと確かに語っています（ロマ 2:17、ヤコブ 2:10、Ⅰヨハネ 1:8、ロマ 7:18、21)。律法は、私たちの罪を通して、曲げられていることを明らかにし、私たちの悲惨さの深さを知るようにさせるのです。私たちが、神の律法を完全に守ることのできない理由があります。人間は、本性上、罪に傾いています。私たちは生まれながら罪悪の中にいました、その罪悪は、大きな勢力をもち私たちを主管して来ました。それで人間の心は罪悪に満ちているのです（創 8:21、エペソ 2:3、創 6:5、エレミヤ 13:23、ヨブ 14:4、ロマ 3:10-12)。

❷ 従って私たちは、本性上、神を憎んでいます。私たちの自然的性向は腐敗された状態に傾いていて、腐敗された属性は、神を憎む傾向を持っています（民 10:35、申 7:10, 32:41、ヨブ15:25-26、詩 21:8, 68:1, 81:15, 139:20、箴 8:36、ロマ1:30, 8:7)。それで人間のすべての考えと行動は、神が命令なさったこととは反対のことを行います。腐敗されている肉的な心は、神と敵になっていて神の律法に屈服しません。

最も腐敗された人間たちは、神を知る知識に対して自分たちを欺いています。罪となった属性は、神を憎みます。罪人は、その本性上、ただ罪を犯し、彼らのすべての感情は悪で、自分たちの楽しみと名誉だけを求めます。罪人たちのすべての行為の目的は、自分にあります。本性が聖霊の御業によって必ず更新されなければならない必要性がここにあります。

01　ロマ書 3:10、23、1ヨハネ1:8、10.

02　創6:5、8:21、エレミヤ 17:9、ロマ書 7:23、ロマ書 7:23、8:7、エペソ 2:3、テトス 3:3.

❸ 罪悪になった人間たちは、神を愛さないだけではなく、その本性上、隣人も愛しません。彼らの根には、隣人を愛するより憎み、自分を愛する心があります。人間の罪性の中には、悪と妬みによって隣人を憎む心が居座っています（テトス3:3)。最も自分が最高で、一番価値があって、自分が隣人より大切だと考えているから、隣人を愛することができません。ましてヨセフの兄たちは、自分の弟であるヨセフを憎みました（創 37:4)。罪人となった人生たちは、隣人によって発生された小さな損失についても怒り、復讐を計画し、行います。

❹ 神の戒めから照らして見た時、このような私たちの悪い本性は、私たちがどれほど悲惨で嫌悪な存在なのかを明らかにしてくれます。実に、曲がった邪悪な世代の者たちです（ピリピ 2:15)。従って罪の定めと審判が私たちに不可避です。私たち自ら改善しようとしても、私たちの行為は直せません。全的に腐敗しているから改善できずに、むしろ罪だけが増加する一方です。

神は、預言者エレミヤを通して、私たちの全的腐敗によって悪に慣れ親しんで、善を行うことができない存在であることを次のように語りました。「クシュ人がその皮膚を、ひょうがその斑点を、変えることができようか。もしできたら、悪に慣れたあなたがたでも、善を行うことができるだろう。」(エレミヤ 13:23)。従って律法は、罪人に彼らの悲惨さを教えてあげます。律法は、罪人の眠っている良心を目覚めさせ、彼らに義務を分からせ、彼らの嫌悪な罪を見るようにさせます。勿論、このような律法の機能は、聖霊さまがその霊魂に影響を与えて、罪と義と審判について叱責なさることで起こります（ヨハネ 16:8)。それで罪人は、罪に対して悲しみ、嘆くようにさせ（ゼカリヤ12:10）救いを探し求めるように、渇望するようにさせます（使徒 2:37)。

❺ 私たちは律法に対して死にました。それは、これ以上、行為契約の条件によって与えられたものではありません。律法を通して命は求めません。最も、律法によってこれ以上、罪に定められることもありません。しかし今は、キリストにおいて律法は、感謝の規定として与えられたものです。これは、神の形の表現です。それゆえこれから私たちは、神を愛し、隣人を愛することです。キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです（Ⅱコリント 5:14)。また、これからは律法を、相応しく用いることで

す。これが私たちの善だからです（Ⅰテモテ1:8)。そういうわけで使徒パウロは、この基準に従って行う者には平安と憐れみがありますようにと、祝福したのです（ガラテヤ 6:16)。

❻ 5番の質問と答えについて、反対の思想があります。ペラギウス思想です。人間は罪によって弱くはなったけれど、やはり道徳的な力を持っているので、神から恵みの助けを受ければ、戒めを守ることができるとの主張です（Ⅱコリント 5:17、エペソ 2:10)。相当、それらしいですが、聖書的ではない主張です。人間は罪によって完全に腐敗されたので（申 32:5）腐敗された品性が変化を受け、新しい被造物にならなければなりません（Ⅱコリント 5:17、エペソ2:10)。それにも関らず、ペラギウス思想は教会史の中に続けて存在しました。それで罪人は、必ず、新生しなければならないという教理に反対して、人間自らキリストを選ぶことができ、善を行うことができると強調したのです。

今日、福音主義教会の中にも、このようなペラギウス思想が影響力を及ぼしています。それで彼らは新生の必要性を無視して、人間が神の恵みの助けを受け、イエスを信じることができると言い、伝道する時にも対象者に、早く、イエス・キリストを主と受け入れる決定をしなさいと勧めます。結局、このような伝道メッセージと方法は、人間の腐敗された本性についての無知から始まったこととして、聖書的ではありません。